

嫁姑の争鬭の激しい夫人

【原稿集】 十三頁 家庭の聖化

家庭の聖化は、主婦の信仰の程度の如何によつて大いに影響するものでありますから、嫁となり主婦となり母となるには現当二世の光益を蒙る他力不思議の願力を聞信して、真俗二諦の妙旨を心に掛けて家庭を聖化して戴かなくてはなりません。或る時付近（大辻）の炭坑の婦人会に出張しまして、嫁姑の争鬭の激しい夫人が参詣されておつたので、人事課長の方が、「先生あの婦人が信仰に生きて家庭が明るくなりさえすれば、この炭坑はどれだけ救われるか知れません。婦人会の幹部でありながら家の中が火の車ですから、人から仏教の軽重、信仰の無用論までも論じられて居るのです」と聞かされ、講演の後示談の時、例の婦人が、「先生信仰を戴けば家庭が明るうなりますか」、他力不思議の信仰を獲得すれば必ず一切に向かつて感謝致しますから拝み合いの生活が出来ます、本当に広い天地、自由の境地が有りますから徹底する迄、大満足する迄熱心にお聞きなさい。

墮ちる者をお助け 死にさえすれば往生と理屈や道理なら直ぐに判るけれども、道理理屈を離れた不思議の仏智を諦得する事は至難であります。電気が点れば闇は逃げる、御飯を戴けばお腹は満たさると知ったからとて明るくもなりません、満腹もしません。法の尊さを仰ぐときは自ずから機の醜さは照らし出され、機の醜さの見ゆるといふことは 法が如実に照らして居るのであつて、鏡に向いて姿の見えない筈がありません、見えなければ鏡が曇つて居るか盲目かであります。不実一杯の悪性が照らし出された機の真実と 若不生者の念力が一つに成つた時が信樂開發の妙味ですから、その時の境地は みに親に撰取された人のみの諦得する満足であります。「今までは死んだ先の事とばかり思つていましたが、今から明るい生活が出来ますならば、真剣に一生懸命で聞かして戴きましよう」と一心になられました。五六回も講演しに行つた後、御仏壇を御迎えしましたからとて特に招待を受け、読経の後、主婦は語り始められた。

先生、何とお札を申し上げてよいか、一切の無明が晴れて一切の志願が満足せられると仰せられました。私程幸福な者はおりません。姑を呪い主人を恨み子供を邪魔者に思うていた私は悪魔でございました。一切の方々は皆菩薩であります。私一人を仏にする為の御方便であったかと拝まずにおられません。これもみ仏様の念力だから家に相応した御仏壇をお迎えねばと思つて母に相談しますと、御仏壇を買えば年寄りが死ぬると母が死ぬると言いますから、無理にも勧めませんでした。親族の者が来て、御仏壇に参りたいと母に言いますと、箆笥の袋戸棚に祭つてある、まあまあ仏様が借家住居か、主人の十三年に買うと言つて、指を折つて見れば十四年になる、驚いて買う気になり小倉市で買つて夕方までに宅に届けることになつていきましたが来ない、母は子供がお正月を待つように待つていましたら、夜八時頃持つて来ました。

お道具や御打敷きを飾り立てて家族の者が揃つて正信偈を誦げ、このお金を誰が出すかと言つて一段になりました。信仰と言つても、信仰は死ぬる用意とばかり思つていましたが、よりよく生きる用意でございました。主婦に信仰がなければ家庭は破滅であります。何時までも生きていて小言ばかり言つてゐる姑はよい加減に死ねばよいと思ひ、養つてくれる夫に対しても、働かないと不足に思ひ、無垢の子供に対しても邪慳の限りを尽くしている私が、あちらにガミガミ、こちらにギシギシ、こんな悪魔が三千世界に二人とおりましたら、大地がよくも裂けなかつた事と今は懺悔せずにはおられません。着物よりもお錢よりも魂一つを浄化されなければならなかつたのです。この境地に立たして下さつたはみ仏様、その親様のお住居ですもの、お仏壇は私に買わして下さい。

いいやそれはならんと母が口を切られ、私も信仰がお留守で、嫁ばかり虐めていた、御仏壇は年寄りの御守りするもの、又主人の年回で買ったのであり、もう老人はお金は不要だから、臍繰金を皆出しませう。

今度は主人が横手を打つて、信仰は偉大な力だなあ、今迄は疲れ果てて家に帰つても直に障子を明け切らなかつた、今日

は母が泣いているか、今日は家内が愚痴言っているか、母の味方をすれば帰ると言う、家内の肩を持てば死ぬると言われる、自分は何しに人間に生まれて来たか、外で疲れ家で苦しむと悲観していたけれども、この頃の家庭の明るさ、偏に仏様のお蔭ではないか、お前達に出させては済まない、私が買うと言いだしたので、最後は三分の一宛で聯合でお給仕申し上げることにになりました。母が大喜びして今後とも家庭で諍うような事が有ったなら、一番先に来てお礼をした人が勝ちにしようと言われましましたら、十二歳になる男の子が、お婆さん嬉しいかい、嬉しいよ嬉しいよこんな嬉しい事は無いよ、そんなに嬉しいなら今迄喧嘩ばかりせず早く御仏壇を買えばよかつたなあと大笑いでした。と、物語られ、今は家庭和楽の模範となつておられますが、家庭の中心は主婦にあり、聖化は主婦の信仰如何によるのであります。世の中の非常時もさることながら、心の非常時の解決のない人には望まれない、噴き出る貪欲の妄念は青鬼であり、燃え立つ瞋恚の毒焰は赤鬼であり、一秒一秒の火の車に運ばれている現在の地獄を知らない者は永遠に地獄を知らないのです。この無間のどん底から生え抜きの悪性が仏智不思議を諦得せしめられた時、呪い多い人生に光を見出し、苦悩多い娑婆界に限りなき満足を得て、合掌法悦の生活こそ、家庭を聖化し、社会を浄化し、国家を泰平ならしむるのであります。